



海援隊旗(二色きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

越 鳥 ECCHO NANSHI 南 枝

「龍馬最後の帰郷 ―坂本家と川島家・中城家―」展

会期:令和4年11月1日(火)~令和5年1月25日(水)

本展では最後の帰郷で龍馬が果たした役割を考察すると共に、龍馬の人生に大きな影響を与えた川島家と中城家を紹介する。

この最後の帰郷の時、龍馬が持つて帰った銃は、佐佐木高行の日記『保古飛呂比』によると、ミニエ銃と記録されている。アメリカでは、慶応元(1861)年に南北戦争が終結し、ミニエ銃を改造したエンフィールド銃が大量に余っていた。それが慶応2年以降、日本に入ってくる。日本では、エンフィールド銃のこと

龍馬は暗殺される約2か月前、脱藩後最初に最後の帰郷を果たした。この帰郷の目的は、木戸孝允からの書簡とライフル銃千挺を土佐藩に届け、武力を背景にした大政奉還及び、倒幕への覚悟を促すものだった。

久しぶりに故郷へ帰ってきた龍馬は、休息のために種崎の大廻船御船頭・中城家へ立ち寄った。この中城家は同じく種崎にあった藩の廻船問屋・川島家と共に、龍馬が少年期から訪れていた家であり、龍馬は両家から学んだ船や世界に憧れ、海援隊という会社を立ち上げ、海外へ行くことを夢見た。

エンフィールド銃の可能性が高い。今回、注目資料の一つとして、年月日が「16日」とだけ記された溝淵広之丞宛て龍馬書簡を、高知県立歴史民俗資料館から借用展示する。『龍馬の手紙』(講談社学術文庫)の編集者・宮地佐一郎氏は、この書簡を慶応2年11月と推測している。年月が不明なため、全く注目されてこなかった書簡である。短いので、全文を紹介する。

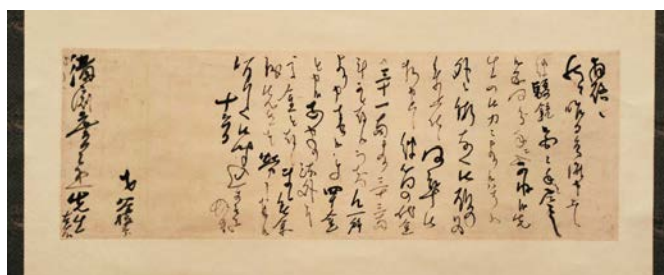
拝啓

然二昨日、鳥渡申上候彼騎銃色々手を尽し候所、何分手二入かね候。先生の御力二より候ハズバ外二術なく御願の為参上仕候。何卒御頼申上候。彼筒の代金八十三両より三十三両計かと存候。うち今二所より申来り候もの四十金と申候。あまり法外に高金と存候ま、無二余儀一先生を勞し奉候。宜しく御聞込可レ被下候。

十六日 頓首 才谷梅太郎
溝淵広之丞先生 左右

騎銃(連発銃)が欲しかったものの、商人に高値を吹つけられたため、買うことができず、あとは土佐藩の溝淵に託す、という内容である。

この書簡は、慶応3年9月16日に長崎で書いたものと推


 慶応3年9月(推定)16日
 溝淵広之丞宛て坂本龍馬書簡(高知県立歴史民俗資料館所蔵)

測すると、かなり重要な意味を持つてくる。この頃の龍馬は、14日にライフル銃1,300挺をハットマン商会から購入し、15日に芸州船へ積み込み、18日に長崎を出港した。この時、龍馬が土佐藩のために買ったかったのは、ミニエ銃ではなく、連発銃だったのではないだろうか。人数で劣る討幕派勢力を勝たせるには、連発銃が必要だと考えていたのではないか。本展では、この推測に基づいて、本資料を慶応3年9月(推定)16日の書簡として展示する。

三浦夏樹

企画展「龍馬が七歳だったころ―天保期の土佐の社会とくらし―」展

今回の企画展、取材に訪れたマスコミの方には「いつもと違う展示ですね」という言葉を何度かかけられた。壁いっぱいパネル、ケース内に長々と絵巻物、別の覗きケースにはおかまやおひつといった民具が入っている。我ながらちよつとした冒険だったが、これには意図がある。

「伝承」が多い龍馬の幼少期については、直接的な史料がない分、いつか違うアプローチでその空白を埋められないかと、かねてより考えていた。天保6年生まれの龍馬はまぎれもなく「江戸時代の人」であり、江戸時代の社会で、同じく江戸時代生まれの親や周囲の人から、一般的な江戸時代の子供として育った。今の私たちが昭和や平成という、生まれた「時代」に育まれたのと同じである。ならば「江戸時代」とりわけ龍馬が生まれた「天保」という時代はどういう時代か、当時の「一般的」とはどういうことか、言ってみれば外堀を埋めることで龍馬の幼少期を描けないかと考えた。現在でも七五三という行事があるように、当時も「七歳」というのは子供の成長におけるひとつの目安である。そこから、龍馬が数え7才

だった天保12年に視点を固定することにした。

7才の龍馬と同じ年ごろの子どもをターゲットに入れたこともあり、暦や数え年、歴史用語など、基本的な事柄を一から説明する必要がある。膨大な分量のパネルができあがることになる。絵で説明しなければ読んでもならないと考え、以前当館の職員だった川崎真優さんにイラストを依頼した。正確を期するため、身分によって異なる衣服や履物、背景となる建物や工作物、イラストに描かれるものの全てに事前の確認が必要となる。史料や関連書籍を探し、川崎さんとは入念に打ち合わせを重ねた。それでも、どうしても抜けたりや、推定で描かざるを得ない部分が生じた。時代考証とは難しい作業である。

加えて、龍馬が生まれ育った「土佐」という要素が大きく反映される。当時の藩主とその治世、藩内の状況、風俗、気候、さまざまな観点から史料を採したが、目当てとする史料が案外残っていないこともわかった。そんななか、昨年担当した高松太郎展で借用展示した「採樵歌」にある義兄・高松順蔵の逸話や、『皆山集』にある曾祖父・井上好春の逸話が拾えたのは幸いだった。展

示資料は、当時の行事や風俗を描いた「土佐年中行事図絵」、花台が登場する「藤並神社御神幸絵巻」（複製）など、カラーの絵巻物を主に構成した。覗きケースには当時のものではないが、昔から形式の変わらない生活道具を展示した。龍馬も、このような道具に囲まれて暮らしていたはずである。

このような展示で、観覧者がパネルを読んでもくれるかがとにかく気がかりだった。展示室の前を通るたびこっそり中を覗いていたが、毎回複数の方がパネルの前で長く足を止めてくださっているのを目にした。教育熱心だった江戸時代の教育書を一例、パネルで紹介したが、特に子どもを持つ方には身近に感じられた内容ではないだろうか。

いわゆる「伝承」も含め今思うことは、幼少期の坂本龍馬はやや繊細でおとなしい、ごく普通の子どもだったのではないかとということである。幼い龍馬は、馭初で父が馬を駆る姿を、母に手を引かれて見物したかもしれない。お祭りで曳き出される花台を、兄に肩車してもらって見上げたかもしれない。月食で欠けた月が元に戻ってゆく有り様を、驚きをもって眺めたかもしれない。想像の域を出ないことだが、大人になっ

て懐かしく思い出す光景とは、多分こういうことだろう。

最後に、多忙ななか大量のイラストを描いてくださった川崎真優さんをはじめ、展示開催にご協力くださった関係各位の皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

亀尾 美香

「龍馬が七歳だったころ」展は10月19日（水）まで開催しています。
見逃された方はお早めどうぞ！



展示室内



今夏は色々なワークショップを開催しました！

新型コロナウイルスの流行で寂しい夏が続いていましたが、今年は3年ぶりに行動制限のない夏となり、各地で祭りやイベントが開催されました。当館も、人気コーナーだった「龍馬の文字で名刺づくり」の期間限定での復活をはじめ、ワークショップや重ね押しスタンプなどの楽しいイベントを行いました。

〈りょうま工作教室〉

現在開催中の企画展「龍馬が七歳だったころー天保期の土佐の社会とくらしー」に関連し、江戸時代の生活を感じてもらうものとして、「履き物」に着目したワークショップを2つ開催しました。

★段ボールでぞうりを作ろう! (8月7日)

午前中は、段ボールで「ぞうり」をつくるワークショップを低学年向けに行いました。固い段ボール紙を切るころは苦労したみたいですが、みんな思い思いの「段ボールぞうり」を完成させました。



★わらじづくりに挑戦! (8月7日)

午後は、本物の藁でわらじづくりに挑戦する高学年向けのワークショップ。長岡郡土佐町から藁草履づくりの名人、和田丁さん、大石栄章さん、山下早苗さんに来ていただき、指導をいただきました。藁をなう体験をした後、みんな「わらじ」づくりにチャレンジ! 龍馬が脱藩したときも、こんなわらじを履いていたのかな、と160年前に思いを馳せたことでした。



〈お楽しみワークショップ〉

帰省中の方が多く来館される8月半ばの2週は事前申込不要で、どなたでも楽しめるワークショップを2週続けて行いました。

★かんたん刀づくり (8月14日)

段ボールや新聞紙、アルミホイルなど身近な材料で刀を作りました。段ボールぞうりと同様に、固い段ボールを切ったり、折ったりするのに四苦八苦しながら、自分だけの刀を作り上げました。



★紋切り遊びを楽しもう! (8月21日)

〈紋切り遊び〉は龍馬記念館の夏の定番ワークショップです。折り紙を折って、型に沿って切りとり、そっと広げると…思いがけない形ができています。無地の団扇に貼って、オリジナル団扇をつくりました。



〈重ね押しスタンプと名刺づくりコーナー〉

各色ごとのスタンプを押していくと最後に絵柄が完成する「重ね押しスタンプ」(8月10～14日)と、龍馬の文字のシールを貼っていく「名刺づくり」(8月13～21日)など期間限定のお楽しみコーナーも大好評でした。

河村 章代

秋のイベントあれこれ

・11月13日(日)「龍馬まつり in 記念館」

来年春のリニューアルオープンをめざし、現在工事が急ピッチで進む桂浜ですが、10月には一部の店舗がオープンする予定です。その桂浜では、毎年、龍馬の誕生日である11月15日に近い日曜日(今年は11月13日)に、「龍馬まつり in 桂浜」が開催されます。同日に当館も「龍馬まつり in 記念館」を開催する予定です。龍馬のとなりに櫓をくんで、龍馬の目線で太平洋を眺める「龍馬に大接近」(今年は9月17日～11月13日)などの人気イベントも浜で開催されますが、当館も館内での楽しいイベントで、桂浜全体を盛り上げていきたいと思っています。

・11月20日(日)「長宗我部フェス in 浦戸」(仮)

当館が長宗我部氏最後の居城であった浦戸城の跡に建つことをご存知でしょうか。もうひとつの城、長宗我部氏の城としてよく知られる、国史跡にもなっている岡豊城の跡に建つのが県立歴史民俗資料館(歴民館)です。歴民館では、毎年長宗我部氏をテーマにした「長宗我部フェス」(主催:長宗我部フェス実行委員会)を開催しており、今年で13回目になります。その伝統ある「長宗我部フェス」に、今年は龍馬記念館も関連企画として関わらせていただくことになりました。甲冑を身に着けた長宗我部鉄砲隊と豊後大友宗麟鉄砲隊による火縄銃の発砲や浦戸城跡からの出土遺物の展示(協力:県立埋蔵文化財センター)、浦戸城跡を中心にウォーキングイベントなどを予定しています。

また、今年は「長宗我部RALLY」(長宗我部フェス実行委員会、一般社団法人南国市観光協会)にも参加します。南国市と高知市を5つのブロックにわけ、それぞれの参加店舗・施設をまわってキーワードをゲットすると、オリジナルステッカーなどのグッズがもらえます。

この秋は、「龍馬まつり」と「長宗我部フェス」で「歴史の秋」をお楽しみください。



ウォーキングイベント (イメージ写真)



大友宗麟鉄砲隊



龍馬記念館初登場!



長宗我部鉄砲隊 (令和3年11月14日撮影)

「長宗我部鉄砲隊」は当館南側の駐車場で毎月公開訓練を行っています。

公開訓練の様子を少しだけご紹介しています。→



浦戸城跡出土遺物の展示
(写真は県立埋蔵文化財センターの展示の様子)

★11月15日は開館記念日で無料開館日!

11月15日は龍馬の誕生日であり、亡くなった日です。そして、もうひとつは当館の開館記念日です。その記念に、毎年11月15日は無料開館しています。どなたでも無料でご入館いただけます。龍馬記念館にお試しに行ってみたいという方も、ぜひこの機会にご来観ください。

河村 章代

龍馬の手紙

16

龍馬の素顔が見える手紙

「坂本龍馬」という人物はあまりにも有名なのだが、私が「龍馬の手紙」と出会ったのはつい最近のことである。

企画展準備のため「慶応元年九月九日 乙女 おやべ宛 書簡」を読む機会があり、読めば読むほど、龍馬の人柄、内面へ思いがふくらみ、様々な想像が脳内をめぐった。国を動かすほどの大事（おごこ）を成し遂げた龍馬は、実に人間味のある素直で繊細な心の持ち主で、家族思いの人だったのではと、勝手な解釈ではあるがとても親しみを感じた。

まず妻・龍を乙女とおやべに紹介している箇所からは、書簡で見ると文字が小さめで少し斜めになって「一気」に書ききったような様子があり、まるで「ねえ聞いて聞いて！」と子どもがお母さんに息せき切って話して聞かせるような感じを受け、龍に出会った衝撃が素直に書かれていることが、

筆跡や文面からよく伝わってくる。

もう一点、特に印象深く感じた箇所がある。「此両家なればちよふど私がお国にて安田順蔵さんのうちにおるよふな、ころもちており候事にて、」これは龍馬が乙女とおやべに送ってほしいと頼んだ物の送付先の説明で、高松順蔵の家を例に出している箇所である。現代語訳で「土佐でいうと安田順蔵さんの家にいるようなつういだ気持ち」とあることから、龍馬が順蔵と千鶴の家へ訪れ、気持ちが落ち着く場所として気に入っていたことが伺える。また手紙の最後にも、高松太郎のためとはあるが「順蔵さんが私にくれた文」を送ってほしいと頼んでいる。実際に順蔵から龍馬へ文が書かれていたことが分かる箇所である。龍馬の手紙が書かれた慶応元年は、龍馬の姉・千鶴が亡くなつて約四年後のことである。姉が亡くなった後も順蔵は龍馬の心に残る存在であったのではないか。

「龍馬の手紙」と出会ったのはつい最近のことなのだが、読み終わった今、なんだかとても近しい人を感じている。家族に見せる素顔の龍馬が、ここにある。

（安田まちなみ交流館・和 文化振興企画員）
小松歩

新コーナー！

Q&A

No.1

当館や高知観光などについて日常寄せられるさまざまな質問と、その答えを職員がリレーでご紹介します。

館内見学 ルート案内

Q. 館内はどのような順で回れば良いですか？

A. 高知県立坂本龍馬記念館は2棟の建物が2階の連絡通路で繋がっております。

黒っぽい建物「新館」の入口から入館し、ガラス張りの建物「本館」の出口まで、平均観覧時間は60分から90分のお客様が多いようです。今回はもう少し時間を割いて120分で全ての展示をきれいに観覧いただけるおすすめの観覧ルートをご紹介します。

受付付近のパンフレットラックに、日本語以外にも5種類の言語のパンフレットをご用意しております。折り畳まれている所を開くと館内マップになりますのでぜひお持ち下さい。

- ①新館1階受付後、シアターコーナーで導入の映像鑑賞。
- ②新館2階展示室3室
（常設展示室→ジョン万次郎展示室→企画展示室）。
- ③新館2階と本館2階を繋ぐ連絡通路を通して本館へ渡る。
- ④本館2階展示を山側から海側まで観覧。
- ⑤本館 中2階休憩コーナーで自動販売機の飲み物で休憩。
- ⑥本館屋上で海を背景に写真撮影。
- ⑦エレベーターで本館地下2階幕末写真館へ移動。
- ⑧本館地下1階図書コーナーで読書。
- ⑨本館1階ミュージアムショップでお土産購入。
- ⑩本館出口シェイクハンド龍馬像の写真撮影。



以上が、出口までの順路です。お疲れさまでした。

高知県立坂本龍馬記念館公式HP内の、来館のご案内（施設案内）にフロアマップを、YouTube 動画一覧にヴァーチャルツアー動画を、それぞれ掲載しておりますので、そちらも併せてご覧ください。

佐々木 恵

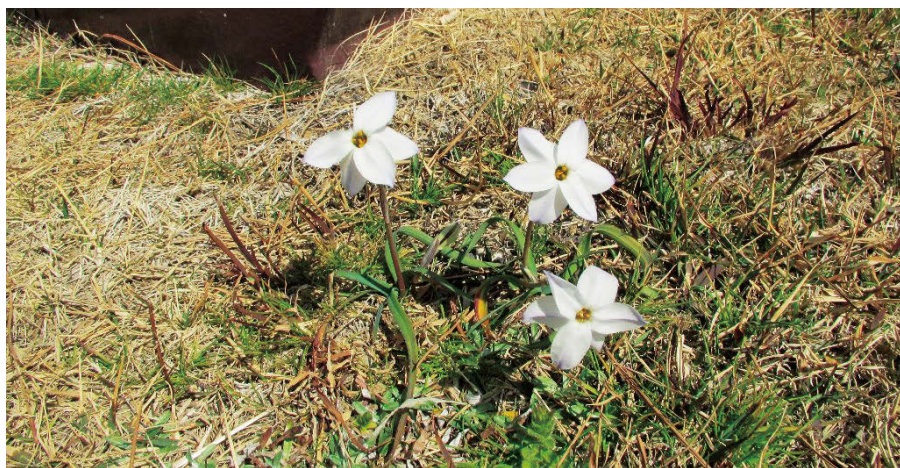
「飛騰」102号(平成29年7月発行)の龍馬学会中刷、宮川禎一氏の連載「こぼれ話―犬歩棒当記(三十)―」に、「田中伯爵邸の白い花」という記事がある。静岡の蒲原にあった田中光頭の邸宅庭に植えられていたハナニラを、昭和10年頃、京都国立博物館の西隣にお住まいの銅鏡研究者・広瀬都巽氏がもらい受け自宅で栽培、約80年後の現在も広瀬家の庭に咲いている、という話である。この話には後日談がある。宮川氏によると、記事を書かれた翌年、広瀬氏のご子息(記事が書かれた当時87歳)から件のハナニラの球根をもらい、さらにそれを当時の高松清之館長がもらいうけ、館の裏手にプランターを置き栽培していたのである。

令和3年3月、筆者は退任の日を迎えた高松館長に館外へ呼び出された。館長はハナニラのプランターを示し、「時期が来たら館の南にある日時計の下に植え替えてほしい」と言われた。詳しい経緯を知らなかったが、その時に初めて宮川氏の記事と、春頃白い花を咲かせていた

プランターが繋がった。これは責任重大である。調べるとハナニラの植え替え時期は9〜11月頃、忘れないよう念じつつ半年を過ごし、同年9月のある土曜日、植え替えを決行した。曇っているがまだ真夏のように蒸し暑い日で、作業を終えて汗を拭きながら顔を上げると、西日が射すなか日照雨が顔に当たった。ハナニラは生命力の強い植物のようで、掘り起こすと土中で殖えた球根がたくさん出てきた。植えきれなかった球根はプランターごと自宅にいただいて帰り、栽培することにした。

約半年後の今年3月、数は少なかったが、ハナニラは日時計の下でぼつぼつと芽吹き、無事に花を咲かせた。やっと安心である。ハナニラ自体はごくありふれた品種だそうだが、このハナニラは少なくとも80年以上、世代交代によつて命をつなぎ、静岡、京都と長い旅を経て今、田中の故郷である高知で花を咲かせている特別なハナニラである。実に感慨深い。自宅にもらつて帰ったプランターのハナニラも、同様に花を咲かせて枯れた。球根は一年かけて土中でさらに殖え、来春また白い花に会えることだろう。

花が咲いているというのは、それだけで何だかうれしいものだ。3月に来館されることがあれば、日時計の下に咲く小さな花にもぜひ、目を留めていただきたい。



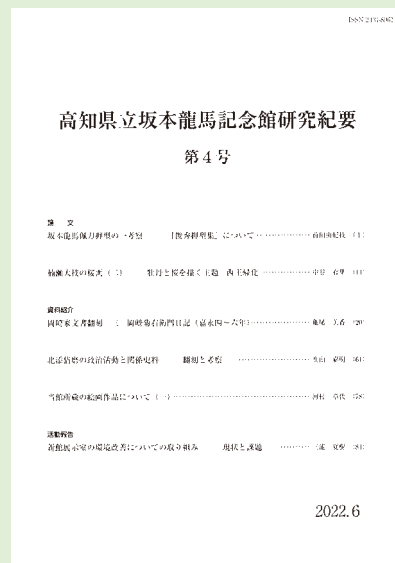
日時計の下に咲いたハナニラの花(令和4年3月撮影)

『高知県立坂本龍馬記念館研究紀要 第4号』 発行のお知らせ

平成30年度、当館の新館リニューアルオープンの年に創刊した『高知県立坂本龍馬記念館研究紀要』も、早いもので第4号となりました。学芸員の日頃の調査研究成果の発表の場として、今後も刊行を続けてまいります。

- ・前田由紀枝「坂本龍馬佩刀押型の一考察 —『俊秀押型集』について」
- ・中谷有里「楠瀬大枝の桜画(二) —牡丹と桜を描く主題「西王帰化」」
- ・亀尾美香「岡崎家文書翻刻 三 岡崎菊右衛門日記(嘉永四~六年)」
- ・高山嘉明「北添佑磨の政治活動と関係史料 —翻刻と考察—」
- ・河村章代「当館所蔵の絵画作品について(一)」
- ・三浦夏樹「新館展示室の環境改善についての取り組み —現状と課題—」

A4版89頁、700円。お求めはミュージアムショップまで。
当館HP「ミュージアムショップ」内にて、通信販売も行っております。



所感雑感

廣瀬 成典

半年を経て思うこと

前号で自己紹介をさせていただきましたが廣瀬です。本コラムを書く機会をいただきましたので、自己紹介の補足を含めて、半年の勤務を経て思うことをご披露させていただきます。

私は、この3月まで高知県庁に37年間務めていました。県庁時代を振り返って思い出深いのは、そのうち約3分の1の期間携わった地域振興と産業振興に関する業務です。嶺北地域や仁淀川流域にも配属となり、地域の方や市町村役場の方と共に地域課題に直接取り組んだこともあります。また、前号でご紹介しましたように、龍馬脱藩ルートの椿原町出身で、中学卒業後に故郷を離れた後は、年に2回ほどしか帰省できない年月を過ごしていました。近年では毎週帰省しており、過疎化・高齢化の進行に直面する中で町役場の方のご尽力を肌身に感じ、感謝する機会も多くあります。こうした職務経験や生活での肌感覚から、中山間地域(特に、過疎地域)への危機感

は常に私に心の中に存在しています。「坂本龍馬」に関しては、脱藩ルートの椿原町出身であるほか、ご多分に漏れず高校時代に「竜馬がゆく」を熱中して読んだことを覚えています。その後、関西の大学に進学し、今でも親交のある友達

に当館にお世話になるようになったことを伝えたと、廣瀬には、龍馬ゆかりの場所を連れ回されたからなあ。」と言われましたがあまり記憶にはありません。また、社会人になった後も「竜馬がゆく」を何度か読み返していますので、龍馬への意識は、私の潜在意識の中に常にあったものと感じています。ただ、歴史小説程度の知識しかありませんので龍馬と龍馬が生きた時代についてもっと知りたいと思っています。

当館で勤務できるようになり、知識と経験が豊富な職員がいることや資料・展示物などから龍馬やその生きた時代を学ぶ絶好の機会を得ることができたと喜んでいます。また、当館を含めた桂浜地域は高知県観光のゲートウェイとして県内各地への観光客等誘導の役割も期待されていること、企画展や海の見えるざらりいで県内関係先の展示・紹介も行っていること、ミュージアムショップでは「地産」の商品も取り扱っていること等から、当館においても中山間地域振興にお役に立つ方策もあるのではないかと考えています。目の前の業務に追われている現状ではありますが、こうした思いを持ち続けながら取り組んでいきたいと考えています。

■「浦戸湾周辺の龍馬とゆかりのある風景とは」

海の見える・ぎやうりいでは、「脱藩160年 維新へつながる土佐の道」Ver/2として、6月25日まで開催していた企画展「龍馬脱藩160年 維新へつながる土佐の道」の展示を見逃がしたお客様や、夏休み来館される皆様にもさらにお楽しみいただきたく、延長展示を行いました。展示には、吉村虎太郎ら土佐藩の脱藩者や龍馬がたどった脱藩ルートの考察をした解説パネルなどを再度展示に取り入れ、高知県北西部の津野町や梶原町などゆかりの名所やおすすめスポットの写真パネルに加えて、両町の紹介映像も上映しました。また、会場に設置してあった津野町と梶原町の観光・歴史のリーフレットは、補充をしてもすぐに無くなり、皆様の関心の高さが伺えました。

ちなみに、今年は龍馬脱藩160年であり植物学者牧野富太郎氏の生誕160年でもあります。そして、来年には牧野富太郎氏がとりあげられる朝の連続ドラマ「らんまん」もスタートします。両氏を生んだ土佐の風土に今後もご注目いただければ幸いです。

今回の海の見える・ぎやうりいでは、企画展「龍馬最後の帰郷－坂本家と川島家・中城家－」展の関連企画として、“浦戸湾周辺の龍馬とゆかりのある風景”を展示します。お客様から尋ねられる質問に、「ぎやうりいから見える浜が“桂浜”ですか?」とよく聞かれます。眼前に広がる太平洋と共に、花街道に添って西に延びているのは桂浜の“西浜”と言い、写真などでよく目にする桂浜の本浜は、当館から東側に位置するので竜王岬の陰となり直接は見えません。とは言え、桂浜へは当館から“椿の小道”を歩いていただくと10分位で辿り着きます。この桂浜と種崎の奥に入り込んでいる湾が、高知の海の玄関口と言われる浦戸湾になります。“浦戸”に関して古くは、紀貫之の『土佐日記』の承平4(934)年12月27日に綴られており、近年では、高知県高知市浦戸出身の漫画家・西原理恵子の絵本作品「いけちゃんとはく」と同名実写映画のロケが、浦戸で行われました。



東孕・西孕



藻洲潟

浦戸周辺には歴史に刻まれた事柄が数多くあるようで、歴史的観点からの龍馬と浦戸の関りについての詳細は、新館の企画展でじっくりご覧いただき、本館の展示では、龍馬とゆかりのある幕末維新期の場所や、浦戸十景になっている場所など、浦戸湾周辺の風景をパネル写真でご紹介します。海模様を傍で感じながら、浦戸湾周辺の歴史から日常風景をごゆっくりお楽しみください。

中村 昌代

入館状況

2022年9月20日現在

(1991年11月15日開館以来 30年310日)

◆入館者数 4,470,338人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 533,578人

編集後記

梅雨明けが早く(その後修正されましたが)、酷暑が長々と続いた今年の夏。よさこい祭りが3年ぶりに開催されましたが、まだいつも通りではない夏でした。クーラーがなくても、江戸時代の土佐は今よりもっと涼しかっただろうと思います。

秋の企画展は「龍馬最後の帰郷」。龍馬のゆかり深い種崎の中城家・川島家を取り上げます。11月にはイベントも多数開催予定です。(か)

館だより“飛騰”第123号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

〒781-0262 高知市浦戸城山830

発行日 2022(令和4)年10月1日 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015

発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp

高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般 500円(企画展開催時 700円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで

「龍馬脱藩160年 維新へつながる土佐の道」記念講演会

企画展

「龍馬脱藩への道」

龍谷大学特任講師・現代龍馬学会理事 高山 嘉明



文久2（1862）年3月、龍馬は無断で国境を越えた。いわゆる脱藩（当時の記録には「出奔」「脱走」「亡命」などと表記される）である。この龍馬の脱藩については、専門家を含め、一般的に「明るい」脱藩というイメージでとらえられる傾向にある。その理由は、脱藩という行為に、志士として出発する龍馬の漠然とした可能性、いわば「無限の可能性」を見るからであろう。ただし、この出発点が、学術的観点から本格的に論じられる機会は多くない。はたして龍馬の脱藩は「無限の可能性」を持ったものだったのだろうか。

注目すべきは、龍馬の脱藩前の行動である。文久元（1861）年、龍馬は讃岐国丸亀での剣術修行のため、土佐を出国した。この時の出入国は、正規の手続きを経ている。ただし、周知の通り、丸亀行きは単なる剣術修行にとどまらず、志士の活動を伴った。そして、この修行から帰国して間もなく、一人の志士として脱藩を決行する。しかし、そうであれば、なぜ龍馬は丸亀行きに乗じて脱藩せず、わざわざ一旦帰国したのかという疑問が生じる。その理由は明快で、この時龍馬は、勤王党の一員として活動したのである。龍馬は、丸亀から長州へ渡り、長州藩の久坂玄瑞と面会して武市半平太からの書状を渡し、そして逆に久坂から武市への書状を受け取り、土佐に帰国してこれを武市のもとに届けた。この久坂の書状で、「草莽志士」が「糾合」して「義挙」に及ぶべきこと（草莽崛起）が唱えられ、「尊藩」（土佐藩）や「弊藩」（長州藩）が「滅亡」したとしてもそこに「大義」があれば問題ないという刺激的な論が説かれたことはよく知られている。実際に久坂と面会した龍馬が、書状に認められたような彼の思想に触れなかったとは考え難い。直後に決行された龍馬脱藩の直接のきっかけをこれに見るべきだろう。なお、土佐からの最初の脱藩者とされる吉村虎太郎は、自分に続いて脱藩者が「十余人も来るへし」と久坂に伝え

ている。その数に龍馬が入っていたことは十分に考えられる。事実、脱藩の際、龍馬の足取りは長州へ向かっている。

ところで、龍馬の脱藩を広く理解するためには、他の脱藩者の事例も勘案し、土佐藩全体の脱藩事情を知ることが肝要である。まず、北添信磨の事例を概観すると、彼は文久2年10月、「眼疾」の「療治」のため土佐を出国した。これは正式な手続きを経たものだったが、結局そのまま帰国することなく、京都を中心として政治活動に従事した。ただし、京都滞留が問題視されるようになって以降も、信磨のことは藩の公文書に「庄屋信馬」と記され、藩における庄屋身分は保障されたままだった。出国のおよそ1年後、帰国命令に信磨が叛いてはじめて、藩は「出奔致候信馬（脱藩した信磨）」との認識を示した。この信磨の事例は、「脱藩＝国境を越えること」という常識が大きな誤解であることを示唆する。龍馬の脱藩を基準にすれば、国境を越えることがその主要な条件のように思われるが、実は信磨のように脱藩の際すでに国外にいた例も多い。次に、沢村惣之丞の事例である。しばしば沢村は「二度脱藩した」と説明される。彼の行動をたどると、文久2年3月初旬、吉村虎太郎とほぼ同時に無断で国境を越えて長州へ行き、その後武市半平太への情勢報告のため帰国、そして同月末、龍馬と共に再

度国境を越えた（これが龍馬の脱藩）。沢村が二度無断で出国したことは間違いないが、ここでの問題は「帰国＝脱藩状態の解除」なのかという点である。勝手に出国して勝手に帰国した沢村の事例に、この条件を当てはめるには無理がある。沢村が「二度脱藩した」という理解こそ、「出国＝脱藩」でなければならぬという固定観念にもとづいた誤解にはかならない。

龍馬脱藩の意義を考えるにあたり、特に強調すべきは、全国的活動を展開する志士としての龍馬の出発点の重要性である。その点において、龍馬は明らかに長州藩系志士として登場した。脱藩の際の龍馬は決して「孤高の人」ではなく、また脱藩をめぐる龍馬の思想・行動が独創的であったとも言えない。ただし、龍馬の独自性は、このように長州藩系志士として登場しながら、その後薩摩藩への接近が見られる点であろう。薩長の仲介者としての龍馬評は議論が尽くされた観もあるが、その一方の素地が、脱藩の段階ですでに備わっていたことに、もっと注目してよいのではないだろうか。その反面、一人の志士としてその後の政治活動を見通して評価するならば、龍馬の脱藩に「無限の可能性」というドラマチックな評価を与えることには慎重になるべきだろう。

高知県立
坂本龍馬記念館・
現代龍馬学会総会

研究発表会

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は6月4日、坂本龍馬記念館新館ホールにおいて、第14回総会・研究発表会を開催した。

昨今の新型コロナウイルス流行状況を鑑み、総会は昨年と同様、書面決議とした。本会は今年度より事業計画を見直し、年4回行われる龍馬記念館の企画展記念講演会を龍馬学会との共催とすること、同講演会をWEB配信すること、観覧招待券や企画展小冊子等を会員に配布するなど新たな事業計画を立て、承認された。

研究発表会は、会員2名による研究発表を午前・午後に行われ、午前の第一部では、理事の今井章博氏が、明治39年の龍馬・

慎太郎四十年忌祭を報じた「土陽新聞」の記事より、龍馬の北辰一刀

流皆伝が追贈された可能性のあることを報告された。続く午後の第

2部では、昨年度まで龍馬記念館学芸員であった高山嘉明氏（現・龍

谷大学特任講師、現代龍馬学会理事）が、学芸員として最後に担当した企画展「龍馬脱藩160年 維

新へつながる土佐の道」に関連して、改めて「龍馬脱藩の道」をめぐる諸説について考察を加えられた

（高山氏の講演は7月4日・19日の間、龍馬記念館HPで配信）。いずれも従来の龍馬像に新たな知見を加えた興味深い報告であった。

第14回 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会総会 研究発表会 当日次第

「龍馬研究の水準を高め、龍馬の真実を追究し、その精神を現代に生かそう」

日時／2022年6月4日（土）

9時～15時

会場／高知県立坂本龍馬記念館

新館ホール

9時 総会（書面決議報告）

9時40分 研究発表会開会

・会長挨拶

・来賓挨拶

高知県教育次長 黒瀬渡氏

高知市教育次長 山中浩介氏

10時 第一部 研究発表会

「坂本龍馬・中岡慎太郎両氏の四十年忌祭から分かったこと 龍馬の北辰一刀流兵法皆伝等は追贈されたものか？」

今井章博氏（現代龍馬学会理事）

13時30分 第二部 研究発表会

（龍馬記念館令和4年度企画展記念講演会）

「龍馬脱藩への道」高山嘉明氏（龍谷大学特任講師・当会理事）

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 第14回総会書面決議のご報告

新型コロナウイルス感染拡大防止

以上により規約第9条（議決）に基づき、すべての議案について、過半数の承認をもって可決されましたことをご報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

会長 宮 英司

坂本龍馬・中岡慎太郎両氏の四十年忌祭から分かったこと

龍馬の北辰一刀流兵法皆伝等は追贈されたものか？

現代龍馬学会理事 今井 章博

明治39年11月15日に坂本中岡両氏四十年忌祭（以下祭典と称す）が京都霊山招魂社で挙行された。

祭典に招待を受けた谷干城は快諾の返事と共に「当時野夫も在京中、殊に親敷相交、横死之時ハ近隣止宿いたし居候故、直に馳付候。当時之状況を想像スルも今猶慨然二不堪候。」と返書を送った。

祭典には坂本家の遺族代表として故直の妻、留が出席。

宮内大臣を務めていた田中光顕は、同日に横須賀で挙行された「軍艦薩摩」進水式に天皇陛下行幸の為、随行し祭典は欠席。同じく佐々木高行、土方久元の宮内派も同様で、三人の連名で祭祀料が贈られている。

霊山招魂社の近く麓翠紅館では、両氏に馴染みの遺物が展示され、それらは、『坂本中岡両氏遺墨記念帖』に収めらると、参列者に配られた。

この祭典から遡る事、二年前の明治37年、日露戦争が勃発し4月13日付「時事新報」の「葉山の瑞夢」記事を皮切りに、龍馬の神格

化が始まる。

こういう状況下で開催された祭典の模様は『土陽新聞』にも5日遅れで報道された。そこには特筆すべきことが書かれていた。

「坂本氏が故千葉周作氏の門に入り剣道を学びたるは全く世の知悉する処にして確かに免許以上の資格を有し中伝位の地位にありし由なるが今回千葉家より坂本氏に対し免許皆伝を送り来り、其霊を慰むる事とせり」(11月20日付)

その後、明治43年に入り、祭典では展示がなかった巻物3本が突如出現する。

坂本弥太郎が明治43年8月30日付で留に宛てた借用証控には「北辰一刀流兵法簡条目録」「同兵法皆伝」「同長刀兵法皆伝」が記載されている。

そして昭和4年5月に開催された「土佐勤王志士遺墨展覧会」出品目録控には「附記、千葉周作ヨリ受ケタル皆傳目録ハ全部焼失セリ於釧路市」とある。

祭典半年前の4月に維新に活躍した人物の功績をその子孫が述懐するという『勤王烈士伝』が編まれた。龍馬の著述者は坂本兼太郎となっているが、一族に兼太郎とい

う人物はおらず、住所も浦臼村となっているのが坂本弥太郎と思われる。一族に伝わる史料がどのようにならざるを得ないかとみると、当時直衝所蔵の詠草「世の人は何とも云は、いへへ」(弥太郎所蔵の「修行心得三カ条」などが披歴されているが、肝心の千葉道場での記述は「龍馬は千葉周作の門に入りて、十分其技に上達しければ、イザさらば諸国を回って他流試合をなさぬもの」とのみ。この時点で一族のもとに北辰一刀流免許皆伝等があれば、このような記述に終始することはあり得ない。

「龍馬の遺品や遺墨は坂本直からその子直衛、直寛から弥太郎とそれぞれに相続されていたが、残念なことに、直衛が相続した品は他に売り飛ばされた形跡がある。例えば、龍馬が千葉定吉から伝授された「北辰一刀流長刀兵法目録」、これは米国シカゴ在住の高知県出身者が昭和38年に当時の高知県知事溝淵増巳氏に売り、同氏の死後高知桂浜龍馬会の所有に帰しているが、これは直衛が北米航路の船に乗っていた時に売ってしまったのである。」(土居晴夫著『坂本龍馬とその一族』より)

「北辰一刀流長刀兵法目録」については様々な議論があり、土居晴夫さんは「土佐史談」170号(龍馬生誕150年記念特集号)に「揚げ足を取るようで気がひけるが、佐那女は天保14年(1843)生まれで安政5年(1858)当時16歳であつたか

ら、佐那女はともかく他の二人の妹はまだ年少者であつて、いくら剣術家の娘でも、それにふさわしい剣技を身につけていたとはとても思えない。」

同じ号に高本薫明氏は「千葉灸治院」で「妹里幾は安政二年癸亥で死し」とし目録が発給された安政5年には、生存していないことになるが、この矛盾を解決するため佐那の回想に典拠のない逸話を盛り込む。「(父は)翌5年1月北辰一刀流目録を与えましたが、坂本さんは目録の中に私達三姉妹の名も書き込む様に頼んでおりました。」

佐那の回想では豫州伊達侯の姫君政子には「妾許すに免許皆伝を以てしたり」とあるが、龍馬への免許皆伝については何等語っていない。

なお、高本氏の研究では佐那は天保9年の生れ。(墓碑五題「土佐史談」135号)

最後にあくまで私論であるが、明治39年11月に千葉家から「北辰一刀流兵法簡条目録」「同兵法皆伝」「同長刀兵法皆伝」「同長刀兵法目録」の4本が発給され、そのうちの一本「北辰一刀流長刀兵法目録」を直衛が持出し、売り払った。他の3本は釧路市の大火で焼失したと考えるのが妥当と思われるが、いかがだろうか。

この龍馬の北辰一刀流免許皆伝等については様々な研究がなされているが、明治39年の土陽新聞記事を踏まえての検証はなく、今後の課題である。

当館SNSより旬のトピックをお届けします。
フォローをお願いします。

夏の特別展示②

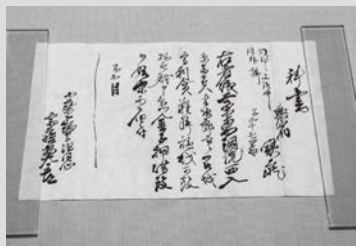
とががき

岡田以蔵科書

(カテゴリー：常設展示)

土佐藩の下級武士である岡田以蔵は、幕末に「人斬り以蔵」と恐れられた人物ですが、最近では、ゲームなどで人気が高いようです。現在、常設展示室では、「夏の特別展示」として「岡田以蔵科書(とががき)」(土佐藩京都藩邸史料より、当館所蔵)を展示しております。「科書」とは、今でいう「罪状文」です。勤王党から離れ、土佐藩からも脱藩した以蔵は「無宿人鉄蔵」として、京都東町奉行所に捕縛されます。さて、その罪状は何だったのでしょうか。ぜひ、展示室でお確かめください。

#岡田以蔵 #藩邸史料



以蔵科書



7月15日(金)インスタグラムより

こぼれ話 ― 犬歩棒当記 (四十九) ―

恋と剣戟

宮川 禎一

循環器系の急病で入院中に病室のテレビで古い映画を観まくっていた(入院費の内)。『ローマの休日』や『カサブランカ』や『オズの魔法使』などを観ては「名画はやっぱり名画だなあ」などと病人なのに感心していた。その中で二番繰り返し観た映画のことを書きたい。『ロビンフッドの冒険』という一九三八年のアメリカ映画だ。八十年以上も前の作品だが総天然色テクニカラーが目には鮮やかだ。

もつと素晴らしいのは脚本だ。心躍る剣戟シーン(剣を上段に構えた豪快な西洋ちゃんばら)とロマンスと笑いとが絶妙にバランスされていて、ずっとハラハラ・ドキドキである(心臓が悪い)。映画の終盤では獅子心王が帰国して大剣戟戦の末に弟ジョンを国外に追放。ロビンフッドは王から伯爵の称号と領地をもらい、さらにはマリアン妃と結婚してめでたしめでたしの大団円である。

映画は十二世紀末のイングランドが舞台だ。獅子心王リチャード一世が十字軍として大陸に遠征し、留守となったイングランドでノルマン人勢力と結託した王弟のジョンが王位を狙って暴政を行うのだが、シャーウッドの森のロビンフッドがそれに敢然と立ち向かうという時代劇である。主役のエロル・フリンは甘いマスクで足長で、衣装は緑色で、これは人気があったであろう。その恋の相手役であるマリアン妃(笑顔の素敵なおリビア・デ・ハレランド。のちに

ズ第三作にあつた森の中の戦闘シーンだ」などと後世の映画に大きな影響を及ぼしたことも分かる。これを観て監督や脚本家や役者や衣装担当者など映画産業に身を投じた人が沢山いたはずだ。さらには少年少女が「十字軍のことをもっと知りたい」などと思つて歴史学者にもなつただろう。大河ドラマを観て日本史の研究者になつた人が多いのと同じだ。映画が歴史研究にも影響を与えるという話である。

『風と共に去りぬ』で準主役は最初ロビンにつんけんしていたものの、あとでベタ惚れするという絵にかいたような「ツンデレ」のお姫様であり、その衣装も豪華でデザインも色彩も素晴らしい。



鎌倉の源頼朝墓
(リチャード一世と同世代の人)

これからの現代龍馬学会

会長 宮 英司

今年の現代龍馬学会にご参加いただいた方々には、以前の現代龍馬学会との違いが鮮明になったのではないのでしょうか。一昨年度のコロナ禍による中止、昨年度のリモート開催を経て、今年度は理事会でも協議を重ねた末に新しいスタイルを少しだけ打ち出すことができたかと思っています。

何がどう変わったかを列挙してみますと、①現代龍馬学会と企画展講演会のドッキング、②会員の特典の明確化とPR、③「宣言」の廃止、④「会報」の発行回数の見直し、⑤会費の納入方法(手数料の低減策の周知)、⑥発表は「龍馬」にこだわって、⑦理事会のシンプル化…ということになるでしょうか。

①については連続講演会がスタートする時から「この連続講演会こそが現代龍馬学会ではないだろうか。」という指摘もあり、紆余曲折を経て、今回の企画展講演会とのドッキングとなった次第です。

②については、企画展講演会の要旨などの「会報」や、館だよりなどの配布に加え、企画展小冊子の配布等へと拡充されました。この小冊子配布は、ご多忙で企画展を見逃した方々にはたいへん喜ばれることと存じます。

③については、毎回の発表会のラストに実施していましたが、研究発表と宣言は馴染まないとの判断で今回からなくなりました。

この「企画展講演会と現代龍馬学会研究発表会」を一緒にお届けする新しい方式は、現代龍馬学会理事・龍谷大学特任講師の高山嘉明様の「龍馬脱藩への道」と現代龍馬学会理事の今井章博様の「坂本龍馬・中岡慎太郎両氏の四十年忌祭から分かったこと〜龍馬の北辰一刀流兵法皆伝等は追贈されたものか?〜」でスタートいたしました。どちらも目の肥えた龍馬ファンの皆様喜んでいただけたことと思います。

以上、いくつかの変更点を挙げましたが、新しいスタイルで実施した直後の理事会において、更なる見直し案が出てまいりました。それは午前の部は総会だけに充てて、午後の部に「企画展講演会と現代龍馬学会研究発表会」を連続して実施しようというものです。

本会創立の趣旨には「坂本龍馬の思想と行動に学び、その精神を今日に生かそうとして高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は発足いたしました。……。」と記されています。私たち会員一人ひとりが、創立時の情熱に学びつつ、新しい現代龍馬学会を築いていきたいと考えています。

個人的な視点を言えば、会員の交流を活性化するための「ハガキ投稿」にもう一度チャレンジしてみたいと思っています。さらに、次代を担う子どもたち向けに現代龍馬学会として何ができるかを検討してみてもいいのではないかと考え続けています。